

幼さという戦略——「かわいい」と成熟の物語作法／目次

序章 支配しようとしめない声とは？……3

第一章 幼さの文化……10

幼児語の居場所 幼児的なのは悪いことか 成熟拒否のニッポン 近
代と幼年期 消費社会の永遠なる「幼さ」

第二章 太宰治と幼さの技法……27

生きる態度としての「幼さ」 『人間失格』と近代文化 声の役割 弱
さと声 小説の読みやすさとは？ どこから聞こえてくるのかわからな
い 頼りがいのない語り手

第三章 村上春樹とカウンセリング……52

いかにも村上春樹的、とは？ 会話をハシゴする多崎つくる 無音とい
うルール 耳元で囁く 役割の交代はなし 「私」はいつも救われる
なぜインタビューなのか

第四章 「かわいい」の美学……85

何でも「かわいい」「かわいい」の起源 「かわいいウサギ」の新しさ
オタクと「かわいい」「かわいい」は日本の専有物なのか 「かわい
さ」に先立つもの——「崇高さ」と「美しさ」

第五章 「かわいい」の境界線……104

「ああ、かわいいわねえ」の機能 抑圧される「かわいい」「かわい
い」から外れるもの 誰が「武田百合子」を可能にしたのか？ 偶然、
読むということ

第六章 幼さと逸脱……121

幼さという選択 言葉がちやんと意味しないとき——「不思議の国のアリ
ス」の言語状況 言葉の意味を決めるのは誰か？ 幼さと付き合う多和
田葉子 幼さと不安 主人公を救す 語り手が叱られる

第七章 幼さの詩学……143

私の気分を語りたい 朔太郎と「詩のにはひ」 不まじめに語りたい
幼さと未開人

第八章 幼さと成熟——大塚英志と江藤淳……161

老いるオタク 江藤淳が読む幼児性 江藤淳の薄暗い部分 江藤淳の
攻略法

第九章 老い語りの可能性——小島信夫の場合……186

江藤淳の批評を縛ったもの 成熟神話の限界 『抱擁家族』の「とまど
い」の真相 時間はかり先に進んでしまう 幼さと成熟を超える語り
老いの語りとは？

第十章

古井由吉の成熟法……204

失われる中年期 虚構と呪術 「円陣を組む女たち」の複数性 成熟
と拮抗 「権」と主語

終章

老いの中の幼さ……224

プラス思考の老人語り 介護小説の隆盛 孫と祖父母の物語 老女に
惹かれる

主な参考文献……241

あとがき……247

幼さという戦略
「かわいい」と成熟の物語作法

阿部公彦

序章 支配しようとしなない声とは？

人の話をちゃんと聞きなさい！

子どもの頃、そんなふうには叱られたことのある人は多いだろう。私もそうだった。話を聞くのは苦手だった。先生がしゃべっていても、どうしても別のことを考えてしまう。気が散ってしまう。気づくと、もう話はあらかた終わっていて、大事なポイントを聞き逃している。

子どもは話を聞くのが苦手なものだ。ちゃんと話を聞けないのは、まだまだ幼い証拠なのだ。ところが、大人は話をするのが大好きだ。学校の授業、校長先生のお話、警察署から人がきて交通指導……。話をするのはいつも大人で、聞くのは子ども。そんな構図がある。だから、こら、ちゃんと聞きなさい！ と叱られながら、いつも子どもは大人の話を聞かされている。

なぜだろう、と思う。そうでなくてもいいはずなのに。子どもが話を聞かなくていい世界はないのだろうか。あつたとしたら、それはどんな世界だろう。

大人になつてあらためて考えてみると、その事情はわかる。背後にあるのは、決まりや知恵や価値観を伝授しようとする側の権力の意識だ。語るとは相手を説得し、思うようにコントロールしようとする支配欲のあらわれ。だから、大人と子どもをひとつの典型として、社会の中ではしばしば、このような語り手／聞き手という関係が見られてきた。学校、会社、行政、宗教……さまざまな場で、知恵と経験と力とを備えた人が、未経験で力のない人に何かを語り聞かせるという状況が生まれる。大袈裟な言い方をすれば、社会はそういう（語りのシステム）を通して安定を実現しようとする。言葉は支配のための最大のツールだから。

でも、それだけだろうか。語りというものは、もう少し違う働き方もするのではないか。つまり、支配しようとはしない言葉もあるのではないか。勝とうとはしない。説き伏せたりせず、鋭さや賢さを振りかざしたりもしない。むしろ、負けたり、弱かったり、だめだったりする。そんな言葉が社会の中でむしろ意味を持つこともあるのではないか。

本書の出発点となったのはこうした問いだった。

このことを考えるのにちょうどいいサンプルが、小説や詩の世界にある。作品中の語り手というものは、なぜか頼まれてもいないのに勝手に語っている。好き好んで語る人というのは、むしろ自分の中に何か抑えきれないものを隠し持っていることがある。どうしても制御できない弱さ、痛み、そして幼さ。うまく言葉にはできないが、だからこそ、語りたいのである。しかも、そんな「負い目」が、相手に訴える力を生む。

つまり、賢く強い人が弱い人を説き伏せるとするのが社会の「表」の構図だとすると、その「裏」では別の構図が機能しているのではないか。それは、未経験で力のない人こそが語り、知恵と力を備えた人がそれを聞く、という構図である。ひよつとするとほんとうに上手に語るのはいわゆる「大人」ではなく、むしろ「弱い人」や「幼い人」なのかもしれない。

もちろん、反論はあるだろう。そもそも語るとはどういうことか。語るとは、特権的な行為である。語るとは、能力と経験のある選ばれた者に許される行いであり、人を惹きつけるに値する何かを持っている人のみがその権利を有するのではないか。果たして、幼く弱い人にそんな行為を全うすることができるのか。

できる、というのが本書の答である。「幼さ」には力がある。「幼さ」を通してこそ生きてくる言葉がある。

以下の章では、個別の作家や詩人の例を見ながら、どのように「幼さ」が語りを生かしているかを具体的に確かめていきたい。とりあげるのは谷川俊太郎、まどみちお（第一章「幼さの文化」）や萩原朔太郎（第七章「幼さの詩学」）といった詩人から、太宰治（第二章「太宰治と幼さの技法」）、村上春樹（第三章「村上春樹とカウンセリング」）、武田百合子（第五章「『かわい』の境界線」）、多和田葉子（第六章「幼さと逸脱」）といった散文の書き手までさまざまである。『不思議の国のアリス』にも言及する（第六章「幼さと逸脱」）。

幼さは病や失語とも近接するが、そうした危うさや弱さも、語りにとつては有利に働く。とりわけ村上の作品を読むとわかるのは、「幼さ」を通してカウンセリグ的と言つてもいいような場が生ずるということである。語りを聞く、あるいは読むということは、このカウンセリグ関係に引き込まれることを意味するのではないか。幼さはそうした関係性の呼び水になっているのではないか。

「幼さ」とは奥の深い、不思議なものである。私たちは「子ども」とか「幼さ」といった概念をあたりまえのように受け取るが、実はこれらはそれほどあたりまえのものではない。むしろ、「子ども」「幼さ」「弱者」といった概念を振り所にして世界を見てしまうこと自体に、私たちのものの見方の偏りがある。今のように入人間の一生の「幼児期」がそれと認知されるようになったのはこの数百年のことにすぎない、近代以前は幼児期は所詮大人未満、大人以前として見られていただけだった、とする説もあるほどだ。

では、それ以前はどうだったのだろうか。近代になって「幼さ」がこのように公認されるようになった背景には、言葉の流通がからんでいる。古来、言葉や情報のやり取りには権力が深くかかわっていた。権力の第一歩はおそらく情報の支配にある。だから情報は、しばしば権力の近くに置かれた。情報をいかに記録し、記述し、伝えるかに、権力を持つ者はおおいに気を遣った。

しかし、近代になり大きく事情が変わる。権力による情報のコントロールが難しくなったのである。紙などのメディアを通じた情報の発信はコストが下がり、権力を持たない者もそれを効果的に行うことが可能になった。そのため、権力や権威によつて守られていない、ときには未チェックで未加工であやしい、信用もできない情報が出回ることが増えてくる。

ところがおもしろいことに、私たちはそういういかかわしい情報にこそ惹かれてしまうのである。信頼できない語りや虚構のつくり話を追い求め、その力に感動しさえする。小説というジャンルが近代社会で大きな役割を果たしたのもそのおかげだ。そして、そうした動きと併行する形で進行したのが、「幼さ」や「子ども」という概念の定着だったのである。

言葉を発信する権利が解放されるとともに、それまで賢者や権力者に独占されていた公の言葉は、非賢者や非権力者によつても担われるようになった。愚者や弱者、病に冒されたもの、幼い者、ものが見えていかなかったりわかっていたりいなかったりする人々が、みな積極的に語るようになった。つまり、近代社会は「幼さ」や「子どもらしさ」を公認するとともに、そこに一定の表現の場所を与えたわけである。

考えてみれば、近代人は幼くありつづけることを強いられてきたのだとも言える。たとえば「消費」という概念には、物を買う消費する人を、知識に乏しい無知な人と見立てる視線が内在する。教え、警告するというスタンスの広告が巷に氾濫するのともそのためだ。私たちもそれを不思議には思わない。学校、役所、警察といった公共機関にも——善意には満ちていても——どこか保護し、教え諭そうとするようなパトロナイジングな視線がある。善良な一般市民は

「幼い人」と見なされるのである。「幼さ」は、そういう意味では、徹底的に社会化されてきた。

しかし、そうした「大人が語り、子どもが聞く」という、権力者の設定した（語りのシステム）の中に住み着きつつ、まさにその「幼さ」や「弱さ」を盾に取るかのようにして転覆的な力を持つてきたのが、近代の「幼さの語り」でもあった。ときには大人の言葉やシステムの束縛をひっくり返すかのような巧妙さとともに、愚者や幼い者は言葉を発信することができる。

現代の日本には「幼さ」が氾濫している。そのもつとも目につくあらわれが「かわいい」という形容の一人歩きである。「かわいい」という語は、もはやその指示対象を離れ、日本文化を象徴するキーワードとして国際化しつつあるとさえ言える。

しかし、「かわいい」は必ずしも日本文化の専売特許ではない。第四章「『かわいい』の美学」から第五章「『かわいい』の境界線」にかけて焦点をあてるのはこのことだ。「かわいい」の美学が注目を浴びるようになるその背後にあったのは、二〇世紀に入って加速度的に進行したいくつかの要因である。消費社会の円熟、パブリックとプライベートの分離、女性的な価値の称揚、いわゆるドメスティックなもの（家庭的なもの）へのこだわりなどである。こうした「かわいい」の美学による旧来の価値観の転覆は、世界規模で起きている。

とはいえ、日本でサブカルチャーがかつてのハイカルチャーを駆逐していった様には、よそでは見られない独特な現象が見取れる。本書の第八章「幼さと成熟」から第十章「古井由吉の成熟法」で注目したいのは、日本でこの推移が何よりも「批評の衰弱」という形を取ってあ

らわれたということである。江藤淳はサブカルチャー的なものに対して非寛容であることで知られた保守系の批評家で、「成熟と喪失」を語ることで批評家としての自己形成を成した人だが、その江藤がうちに「幼いもの」を抱えつつ、ついにそれを解放しそねたこと、それゆえある意味では「幼さ」によって足をすくわれたと見えるのはとても意味深い。第八章ではそのあたり、大塚英志の視点を借りて江藤淳の「かわいい」との付き合いを読み直す。

幼さの氾濫。現代作家の中でもとりわけ成熟や円熟にこだわりつづけてきた古井由吉は、現代人が成熟を忘れたと指摘する。今や、幼いまま大人になった人が、唐突に老い、死を迎えるということがふつうになりつつある。そうなると、幼さから成熟をへて老いに向かうというプロセスはどうなってしまうのだろうか。老いた人はどのような声を持ちうるのか。「幼さ」の氾濫する社会に、どのように「成熟」や「老い」が居場所を見つけるかを、小島信夫（第九章「老い語りの可能性」）や古井由吉の語りは示してみせる。

最終的に私たちは問い直すかもしれない。賢者はいったどこにいいのか、と。私たちに真実を教えてくれる、信頼のできる声はどこで耳にすることができなのか、と。しかし、失われた権威をノスタルジックに追憶しても何にもならない。私たちは、幼さが魅力的な解決法として生まれでた世界に生きている。幼さが、知恵であり戦略でさえある、そんな場が目の前に広がっているのである。

第一章 幼さの文化

幼児語の居場所

言葉は誰がしゃべるかによっておおいに形を変える。とくに日本語では男言葉女言葉、老人語や幼児語など、老若男女それぞれが立場に応じた言葉を使いこなしている。男が女言葉を、女が男言葉を使うのは特殊な場合だろうし、老人でないのに老人語を使うのもおそらく限られた状況だ。

ただ、幼児語についてだけはちょっと事情がちがう。たしかに幼年者は幼いしゃべり方をするものだろうが、同時に、幼年者でないのにそうした語り口になることがある。たとえば、幼児に話しかけるお母さん。「ほら、そんなところさわったら、ばっちいよ」とか「ばいばいしないとね」といったふうに、話しかけている相手が幼児であるために、幼児ふうの言葉で話す。本を読んでも、「あ、これは子どもに向けてしゃべっているのかな」と思うことがある。

谷川俊太郎の『こころ』は、タイトルの通り「こころ」をテーマにした詩集だが、収められた作品の多くには年少者の影が感じられる。

こころ2

心はどこにいるのだろう

鼻の頭にニキビができる

心はそこから離れない

だけどメールの着信音に

心はいそいそすつ飛んで行く

心はどこへ行くのだろう

テレビドラマを見ていると

心は主役といっしょに旅を続ける

でも体はいつもここにいただけ

やんちゃな心を静かに守る

体は元気いっぱいなのに
心は病気がこわくて心配ばかり
そんな心に追いつけなくて
そんな心にあきれてしまって
体はときどき座りこむ

〔二〕

どことなく子どもっぽい語彙が混じっているし、全体に平易な語り口。語り手自身は子どもではないことが何となくわかるのだが、「幼さ」がうまく混ざってあって、聞き手として子どもが想定されているように読める。でも、大人が読んではいけない詩ではないし、むしろ、大人こそが読むべく書かれている作品とも思える。

詩ではこういうことがよくある。まど・みちおの「うたを うたうとき」はこんな作品だ。

うたを うたう とき

わたしは からだを ぬぎすてます

からだを ぬぎすてて

ころろ ひとつに なります

ころろ ひとつに なって

かるがる とんでいくのです

うたが いきたい ところへ

うたよりも はやく

そして

あとから たどりつく うたを

やさしく むかえてあげるのです

〔まどみちお 全詩集〕

平仮名だけで書かれた詩で、必ずしも語彙が幼児的というわけではないが、幼年的な素朴さを感じられる。「からだを ぬぎすてて／ころろ ひとつに なります」には無垢への憧憬が感じられるし、「ころろ ひとつに なって／かるがる とんでいくのです」とのイメージには子どもらしい想像力が發揮されているように見える。しかし、詩全体として見ると、幼年期にある人だけを対象としたものとも思えない。とりわけ「うたが いきたい ところへ／うたよりも はやく」とか「あとから たどりつく うたを／やさしく むかえてあげるのです」

というあたりは、思わずはつとするようなひねりがこめられ、むしろ子どものふりをした大人のぞくようにさえ感じられる。でも、このこっそり隠れた「大人」は、「子ども」として語るからこそ、こんなことが言えたのかもしれない。「子ども」のふりをするのでこそ「大人」が解放された。「大人」しか知らないことを言うのに、「子ども」の仮面が役に立ったのである。

こうした例にもあらわれているように、現代の口語自由詩ではしばしば語り口に幼年の口調が取り入れられる。たとえば、繰り返し、言いよどみ、体言止め、どっちつかずの逡巡といった不器用な草稿は、しばしば子どもの言葉に見られる特徴だが、谷川の作品の「そんな心に追いつけなくて／そんな心にあきれてしまつて」や、まどみちおの「わたしは からだをぬぎすてます／からだをぬぎすてて／こころひとつに なります」といった箇所では、幼年性を感じさせる言葉のおぼつかなさや、むしろ繊細な情緒的傾向をあらわすのになまなく使ったレトリックは近現代の詩ではすっかりお馴染みとなった技法だが、考えてみればこれらも言葉を滑らかに使いこなせていない幼年者が陥りがちな典型的な「失敗」でもある。

詩と幼年性の関係については後の章でよりくわしく見たいと思うが、幼年期特有の心の動きや言葉遣いを大人の語りに取り入れた例は、詩に限らずいろいろなジャンルで見られる。今、あげたふたつの詩には明らかにそれとわかる特徴があつたが、もつと微妙な形で幼さや未成熟さといった要素が混入することで、語りの機能に独特な影響が及ぶことがある。本書の前半部ではそうした例を具体的にとりあげながら、幼さが近代文化において、とくに日本文化の中で、どのような役割を果たしてきたのか考えてみたいと思つている。

幼児的なのは悪いことか

一般に、幼い、幼児的、未成熟といった形容は否定的なニュアンスを持つ。大人が本来備えているべきバランス感覚や抑制、規律などを欠いているときに、「幼児的だなあ」などと否定的なコメントがなされる。しかし、そもそも幼児性とは何だろう。幼いことはマイナスの要因としてだけ片付けられてしまうものなのだろうか。なぜ幼児的であることは否定的にとらえられるのだろうか。幼児性や未成熟をネガティブにとらえる背景には、どのような心のメカニズムがあるのか……。いずれも気になる問いばかりである。

幼児的なのを文化論という大きな枠組みでとらえたアブローチでもつとも有名になったのは、おそらく「甘え」をめぐる土居健郎の考察だろう。土居は「甘える」という語に日本語と日本文化に特有の感覚が内包されていると考え、さらに対象をひろげて「すねる」「ひがむ」「たのむ」とりいる「さらには「すまない」「人を食つた態度」などさまざまな関連表現を組上に載せて、その背後にある独特な二者間の依存関係を明らかにしていく。日本文化に特有の義理人情や、ウチ・ソトの対立、またルース・ベネディクトが『菊と刀』で扱って注目を集め